

正誤表

168 頁 13 行目

誤
長尾善郎 → 正
長与善郎

西田幾多郎と学習院——明治四二年学習院の諸様相——

長佐古 美奈子

はじめに

近代日本を代表する哲学者の一人である西田幾多郎は、京都帝国大学で教鞭をとったこと、西田とその弟子たちが「京都学派」と呼ばれたことなどから「京都」のイメージが強い。しかし、京都帝国大学へ転出する前、明治四二年（一九〇九）八月から四三年七月までの一年間、学習院に奉職していた。

その学習院時代の教え子のなかには京都帝国大学に進学したものがいたこと、西田が京都帝国大学定年後、鎌倉に住居を得、次第に鎌倉で過ごすようになったこと、西田と夫人の没後この遺宅が学習院に寄贈され、それを契機に西田に関する資料が収集されたことなど、「西田幾多郎と学習院」には多くの関係があるにもかかわらず、従来この視点は等閑視されてきた。

このうち西田の学習院勤務の一年間に関しては、西田の評伝などでは省略されているものも多く、記述のある場合

にも「何故に東京の学習院如きに転任せられる気持ちになつたのであらうか」「学習院のやうなところで華族の子弟を教育するといふことは、先生にはどうしても不適任であつた」⁽¹⁾「幾多郎が学習院で教鞭を執つたのは僅かに一年に過ぎない。皇族や華族の子弟に対する授業は無味乾燥であつたらしい」⁽²⁾「学習院の仕事は望むものからは程遠かつた」⁽³⁾などという評価を受けている。

しかし西田自身は自身の書簡において「(学習院に決まれば)非常に幸福」⁽⁴⁾と書いており、また西田の孫にあたる上田薫氏も「(学習院に行ったことについていろいろ言う人もいるが)幾多郎自身はとても感謝していた。この学習院勤務がなければその後の西田幾多郎はなかつた。また、家族も大変感謝していた」⁽⁵⁾と述べている。

このいずれが妥当な評価であるのか。これを考察するためには、西田の学習院時代の実態をあきらかにする必要がある。

ここでは、西田と学習院のかかわりと西田が奉職した明治四二年の学習院における諸様相を当時の西田の書簡、日記、学習院に残る資料、関係者の文章などから検証をおこないたい。

一 西田幾多郎と学習院

(一) 西田幾多郎の生い立ち

西田幾多郎は明治三年(一八七〇)石川県河北郡宇ノ氣村(現宇ノ氣町)の十村(大庄屋)西田家の長男として生

まれた。幼い頃より成績優秀で、宇ノ気村新化小学校卒業後は金沢に出て石川専門学校へ入学した。この入学のため
の家庭教師が一生の恩師となる北条時敬である。この後、明治二〇年同校は官立の第四高等中学校（四高）となり、
西田はここで一生の友である、鈴木貞太郎（大拙）、金田（山本）良吉、藤岡作太郎らと友情を育んだ。しかし同校
の教育方針に反発し、二三年に中退をした。そのため西田は、帝国大学（現在の東京大学）の本科へ進学できずに、
選科に入学することとなった。

二七年に選科を修了した西田は石川県尋常中学校七尾分校教諭、四高嘱託講師、山口高等学校教授を歴任した後、
同三二年北条時敬が校長となった四高へ教授として着任した。しかし三五年北条時敬が広島高等師範の校長となり離
任し、その後着任した吉村寅太郎校長と西田は性格的に合わず苦勞を重ねた。⁷⁾

学問的には四高教授となった頃より『善の研究』のもととなる「倫理学」などの執筆をはじめ、哲学研究を深めて
いった。

（二）東京への上京希望

四高吉村校長との確執に加え、学問研究上の便宜を得たいとの思いから、西田は明治三九年（一九〇六）頃よりし
きりに書簡にて上京の希望を述べている。そのいくつかをみてみると、（傍線部筆者）

明治三九年三月六日「小生一身上のことにつき尊兄の御手数^{（マメ）}を煩はし度候 小生も久しく田舎に居り己を指導し
くるとして今から準備をせねばならぬと存じ候 然るに唯書物を読み居る位の事は何処にてもできるが何か纏つ

た仕事をするには田舎に居ては非常に不便に存じ候故何時か好機あらば東京に出で度と存じ居り候」

同年三月二日「北條先生より御手紙被下文部の事情も分り候故小生は断然好機を得て東京に出で度と決心致し候」

同年二月十九日「扱て今度京都に居る友人より小生に第三高等学校の方へ独語の教師として転任する意なきやと申来り候 小生は先日申上候通り東京の方が第一の希望なり 且又独語は専門にもあらねばあまり好みも不申候へども東京の方にも急に思ふ様に位置もなくば条件次第にて先づ京都の方へでも行いて見んかとも思ひ居り候 北條先生に一つ御相談被下間敷や」

この時期西田は肋膜炎を罹患し、体調不良となりながら、『哲学雑誌』に「実在について」をはじめ掲載した⁽¹¹⁾。北条時敬はこの論文掲載を機に西田をより学問しやすい環境におこうとして動き始めていることがわかる。まず、一高に職を求めて動き出した。

明治四〇年三月二十六日「濱尾総長に面会の件は別に今定まつた話といふ訳でもないが北條先生が小生の事を総長に話され総長が小生に面談して見たしとの事故上京して見んと存じ候」

同年五月十九日「先日は上京いたし井上と同道濱尾総長など訪問いたし候 結果はいかゞあらん 何分無名無能の小生故北條先生等の御熱心なる御盡力にも拘らず成功は六ヶ敷からんと存じ居り候」

同年七月二八日「小生の第一の方は今日まで何の話もなければ正に駄目に御座候 又独乙語の方は強ひて依頼も不致候 又好機會の来る事もあらんと存じ候」

と、北條の努力にもかかわらず、西田の就職はなかなか決まらなかった。

同時期四高の同僚田部隆次⁽¹²⁾が学習院女学部へ転職をした。西田は明治四一年一月二四日の田部隆次宛書簡で

「学習院では男子部にても時間の有無に拘らず一日学校に居なねばならぬにや（中略）又他の学校に働くことは絶対にできぬか 右の件小生の参考までに一寸承り置き度候 又学習院の最近の一覧あらば一寸拜見致し度候⁽¹⁶⁾」

とあり、このころ学習院転職への話が始まったことを感じさせる。しかし、この学習院転職の話も順調にはいかなかったようで、同年五月五日付けの日記では「草稿を一先完結す。松本より手紙来る、学習院の事不確実なりといふ。」五月二五日には「山本良吉君より手紙来る、返事を出す。学習院の方ダメなりといふ。」となり、六月四日に「北條先生より手紙来る。学習院の方望ありといふ。」と結果が出るまで紆余曲折があった。

学習院だけではなく、他の転職口についても前述の一高以降も学習院転職と同時並行で動いていたようで、同年五月二日「小生は地方ならばなくてもないが御地に思ふ様な地位を得るは中々六ヶ敷候⁽¹⁷⁾」六月一八日「小生が京大の学生監となるのに松本が不賛成を唱へたといふのは小生は何も知らぬが或いは然らんと思ふ（中略）京大の学生監は余の親友山本良吉氏が任命せられる事に内定し居り近日の中その発表を見るならんと思ふ（中略）小生の事は君のみならず余の友人は皆先づ気候よき所に移るをすゝめたり 特に名古屋へ行けといふ事をいはれたり 併し余はあまり他の地方に転ずるを好まず（中略）余は一日も早く東京に出で度と思ひ居るなり⁽¹⁸⁾」と地方の就職話があったこと、しかし東京にて就職したい旨を述べている。

北條の推薦にもかかわらず、転職活動はうまくゆかず、四高吉村校長からは「小生の顔を見る毎に、体が弱くて困るとか、学問ばかりしていかぬとか、小言やら厭味やらばかり言はれ、早く出て行けといはぬばかりに虐待されるので、此学校に居るのは非常に不愉快でたまらず⁽²⁰⁾」という状況になっていた。

結局明治四一年六月四日の「北條先生より手紙来る。学習院の方望ありといふ。」の後、七月一六日付けで田部隆

次宛に以下の書簡を出すに至った。

「今は凡て小生の秘密を大兄に申上げ候 必[○]ず[○]く[○]御他言[○]被[○]下[○]間敷候 北條さんの口といふのは實は学習院に御座候これは此の春より話あり 今空位さへでできればすぐに小生が入り得ることに内定致し居り候 空位といふのは例の林伯爵⁽²¹⁾は宮内省の式部官など兼ねその上非常に多忙にて始終学習院の方を休む 然るに此人は金もあり爵もあり且かく多忙なれば遠からず学習院の方をやめるならん さすれば小生は後任たるを得る筈に御座候 併し此人が何時やめるか分らず(さりとて学習院の方からやめる決心もなし) 従つて小生が何時出京し得るや未定の次第に候 此方が早く成功すれば非常に幸福なれどもどうも困り居り候⁽²²⁾」

と学習院転職の話が決まりそうなることを喜んで居る様子がわかる。

ただ、独逸語教師として迎えられることに抵抗もあつたようで、翌四二年六月九日山本良吉宛書簡では「一昨日清水君より手紙来り 学習院にて純独語の教師としてならば小生を採用すると申来り候 純語学教師は小生の素志にあらず 且つ俸給も同一にて経済の点も困り候へとも此機を逸しては又好機も得難しと存し候故それにて承諾の旨返事致置き候⁽²³⁾」と不満も述べているが、結局、「好機も得難し」との判断が優先され、西田は切望していた東京での就職口を学習院にて得ることとなった。

明治四二年七月三十一日「学習院教授」辞令があり、その後、様々な心配⁽²⁴⁾を乗り越え、八月二三日に金沢を出立し西田幾多郎は東京へやってきた。

それでは、西田幾多郎が着任した、明治四二年の「学習院」はどのような状況であつたのか。次に明治四二年前後の学習院の様子をみてみたい。

二 明治四十二年学習院の諸様相

(一) 学習院開校から目白校地への移転

学習院の淵源は弘化四年（一八四七）三月に公家のための教育機関として開講されたことにはじまる。当時は学習所、修学所などと呼ばれていたが、嘉永二年（一八四九）年四月に孝明天皇より『学習院』の勅額が下賜され、「学習院」が正式の名称となった。この学習院は明治三年（一八七〇）七月に閉鎖された。⁽²⁵⁾ 明治二年の版籍奉還にて、大名・公家は「華族」の称号をもってよばれるようになった。明治七年には華族の集まりである華族会館が設立され、その中で華族子弟の教育機関の必要性が提起された。⁽²⁶⁾ この結果、同一〇年、東京府神田錦町に土地の下賜を受け、校舎を建設し、一〇月一七日には学校の開業式が行われた。天皇より、「朕今先志ヲ紹述シ本校ヲ名ケテ学習院ト号ス」⁽²⁷⁾との勅諭を賜り、この学校の校名も「学習院」と名付けられた。

当初は華族会館が経営する私立学校であったが、明治一六年の徴兵制改正で、官立学校の生徒のみが徴兵猶予となつたことから、帝立（官立）とする要望が出され、翌一七年宮内省所管の官立学校となった。⁽²⁸⁾

その後、同一九年二月神田錦町の校舎は火事のため焼失した。学習院は焼け跡での仮校舎建築を計画していたが、同時期、工部大学校が工部省廃止に伴い帝国大学工科大学へ改組し本郷へのキャンパス移転が決定していたため、その敷地・校舎を使用することとなり、同二年八月に学習院は虎の門へ移転した。

旧工部大学校本館はフランス人ボアンヴィル設計で、中央に講堂のある両翼造りの大きな建物であり、その屋根に

は「ジュエラール瓦」が葺かれていた。⁽²⁹⁾ この壮大な建物も、同年一月に院長に就任した三浦悟楼の回想によれば「窓の小さい、陰気な家」であったためまた校舎移転の議がおこり、明治三年（一八九〇）九月四谷尾張町の御料地内へ移転した。

しかし、明治七年六月二〇日に関東地方に地震がおこり、四谷校舎本館は大きな被害を受けた。学習院としては、本館を修理して使用することを考えたが、結局移転が提起された。品川、小田原など様々な移転候補地が出たなかで、同二九年第七代近衛篤磨院長の意見に基づき、東京府北豊島郡高田村大字高田（現東京都豊島区目白一丁目）に中等学科・高等学科が移転することが裁定され、この直後から土地の購入が徐々に進められた。学習院の校舎は従来御料地を利用して建築されてきたが、高田村ではじめて民有地を購入し、校地を建設することとなったため土地買収に時間がかかることとなった。⁽³²⁾ ようやく裁定から十年を経た明治三九年三月二〇日に文部省技師久留正道が「学習院校舎新築ノ設計及工事監督ヲ宮内省ヨリ囑託」された。

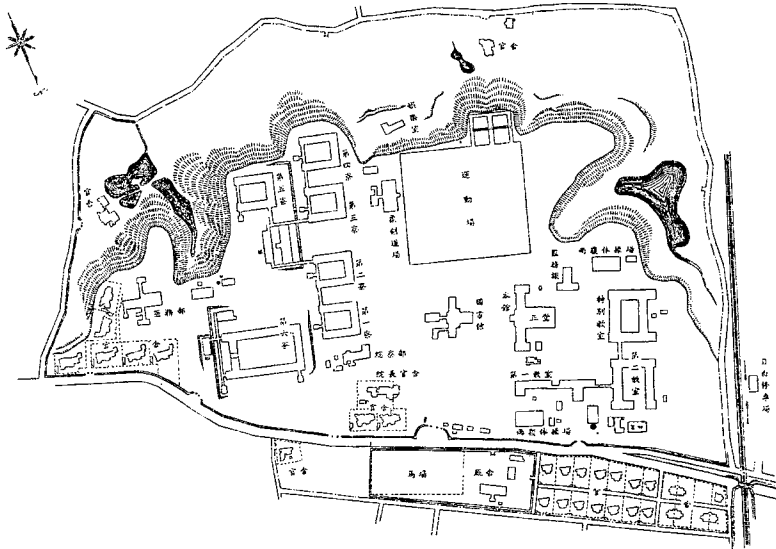
久留正道は明治六年工部大学校の前身工学寮工学校へ入学し、ジョサイア・コンドルから建築を学び、明治一四年に工部大学校第三期生として卒業した。その後工部省、内務省を経て、明治一九年一月文部省に入省した。翌年四月一九日「高等中学校令」が発令され、全国に高等中学校を五校創立することが決まると、久留は同じく文部省に入省した山口半六とともに、一連の創立工事に関わった。明治中後期の文部省学校建築のスタイルを確立した中心的建築家である。⁽³³⁾ 久留設計の建築で現存するものとしては、旧東京音楽学校奏楽堂（現東京芸術大学奏楽堂）、西田幾多郎の母校である金沢第四高等学校をはじめとする各旧制高等学校、旧帝国図書館（現国際こども図書館）などがある。⁽³⁴⁾

設計当初の段階では学習院高等学科は明治三九年をもって廃止される予定であったため、高等学科校舎を新築しな

い計画であったが、翌年になり、高等学科は「当分ノ内之ヲ存ス」こととなった。さらに寄宿舎収容人数は少人数と計画していたが、同年一月三十一日に学習院長に就任した乃木希典の要望もあり、明治四一年五月二十九日「学習院ニ寄宿舎ヲ置キ、高等学科及中等学科ノ学生ヲシテ之ニ寄宿セシム」の宮内省令が出され、中等学科・高等学科の生徒は全員寄宿舎に入ることとなった。⁽³⁵⁾

明治四一年七月中旬に図書館（現史料館）と院長官舎（現在明治村に移築されている）を除いたほとんどの建物が完成した。⁽³⁶⁾

目白校地の建築物は財政難を反映し、図書館書庫を除き全て木造校舎であった。キャンパスのゾーニングは本館・教室ゾーンと寄宿舎ゾーンに明確に分離され、それを繋ぐように中心に図書館が配置されている。久留正道設計は、文部省建築の特徴がよく表れており、校舎の配置は機能的な分棟型で、採光・通風を考慮した片廊下型の平面構成を基本としてい



目白校地（明治43年ころ）

『学習院125年』（2002年）より

る。図書館はキャンパス全体の中で、本館・正堂とともに建坪単価が比較的高く、キャンパスの中心的存在として質の高い設計がなされた。⁽³⁷⁾

院長官舎は、縦長の窓と茶色に塗装された下見板張の外壁の組み合わせという、洋館と和館の部分を合わせもった一部二階建てのもので、洋室部分の内装デザインは図書館と共通している。

明治四二年七月一四日には明治天皇の行幸があり、新校舎完成の式典が行われた。この時乃木院長は鉢植えの榊を天覧に供し、行幸記念にしたい旨を奏上した。翌年三月乃木院長は自費にて院内の富士見台に前方後円墳型の壇を築きその中央に榊を植えた。壇の周囲の石は当時の日本領土境界地から集めたもので、それぞれに番号が付され、採集地が記録された。⁽³⁸⁾ 現在も西一号館南西に榊、石壇ともに残っている。

この式典の直後、新校地・新校舎となった学習院へ西田幾多郎は赴任した。

(二) 西田幾多郎と第十代院長乃木希典

西田が赴任した時の学習院院長は乃木希典であった。乃木希典は日露戦争の「凱旋將軍」である。「凱旋將軍」ではあるが数万の戦死者を出した責任者でもあり、同時に自分の子供二人も日露戦争で失っていた。乃木は自決の意思を持って明治天皇に御前報告に行ったところ、決意を察した明治天皇が「乃木汝に預けるものがある」と学習院院長に任命したといふ。⁽³⁹⁾

西田幾多郎の弟憑次郎も明治三七年八月二四日旅順盤竜山攻撃中にロシア軍の弾に撃たれ戦死している。西田は深く悲しみ「余の弟西田憑次郎を憶ふ」を『聖教新聞』⁽⁴⁰⁾に寄稿している。

「今や加越能三州の民其友を失ひ其骨肉を失ふて思を某地の空に馳する者は幾千人であるかも知れない⁽⁴¹⁾。而して余も實に其一人である。某地の名は廿七八年の戦役以来我国民としても忘るゝ能はざる所であるが今は余が個人の私情よりしても生涯忘るゝ能はざる所となつた。其地の海には余が嘗て同窓の親友たりし向君⁽⁴²⁾を失ふて未だ数月をも経ざる中に余の弟は亦同じ目的の為に某地背面山頭の露と消え去つたのである。(中略)友を亡し弟を失ふは軍国の常事、今の時に當りて徒らに私情を述べ己が弟の事のみあぐるは忠實なる他の戦死者及び私情を忍んで黙し玉へる他の奥床しき人々に對して耻しき心地もすれど、余が骨肉の情已まんと欲して已む能はざる者ありて擧げていふべき程の事もなき弟の一生なれども拙き筆に記して涙ある同胞が一片の同情を乞はんとするのである。(後略)」

この思いを日記から探れば以下のようである。⁽⁴³⁾ (抜粋)

明治三七年六月二九日「午前十時二十分憑次郎出征。」

明治三八年一月二日「午後三時半頃旅順口陥落、ステスセル降服の號外至る。愉快不自禁。北國男子忠勇の功也。全市鐘鼓を鳴らして之を祝す。」

一月五日「正午公園にて旅順陥落祝賀会あり、万歳の声聞ゆ。今夜は祝賀の提灯行列をなすといふが、幾多の犠牲と、前途の遠遠なるをも思はず、かゝる馬鹿騒なすとは、人心は浮薄なる者なり。」

一月七日「今日の新聞にはステスセルと乃木將軍と水師宮に会見し(五日正午)胸襟を開いて懇談したといふ話がつて居た。」

三月二四日「後備五十聯隊長龜岡氏が憑次郎の遺骸を葬りたりとの兄よりの手紙を示す。早速龜岡氏に手紙を出す。大拙より舎弟を弔ふ Sonnet を送り来る。」

五月三十一日「東郷大将の詳き公報の続出づ。實に意想外の大勝なり。国民歎喜措く所を知らず。」

八月二八日「講話談判にて日本は大讓歩をなしたり、ダメく。」

八月三十一日「講話条件を見るに大屈辱なり。日本の元老閣徒何の顔ありて国民に対する。償金とれず樺太も半部ゆづり、鉄道も長春とはナサケナキことなり。吁々万事休す。」

西田は弟を亡くし悲しい思いで、戦勝を祝う気持ちにはなれない。しかし、だからこそ講話に弱腰で望むことには納得がいかない様子がわかる。この因縁の乃木大将と学習院にてまみえることとなったわけである。

院長に就任した乃木は早速教育改革を行った。全寮制を採用し、自らも寄宿生活を実践した。質素、儉約を徹底させ、例えば時計、万年筆の使用を禁じた。自らの陸軍生活を反映させ柔道・剣道を正科とし、初等学科では木剣体操を課した。従来行軍演習として行われてきたものを陸軍大演習の見学演習とし、露宮し、食事も軍隊と同じ兵食とした。また、游泳の際も天幕にて宿泊させ、自ら和船の漕ぎ方を教えるため櫓船を寄贈した。⁽⁴⁴⁾乃木の登場により第七代院長近衛篤磨・第八代菊池大麓が進めてきたような従来の外国のものを積極的に受けいれるというような⁽⁴⁵⁾、「貴族的雰囲気」はなくなっていた。

乃木の改革は当時学習院内ではどのようにみられていたか。質素儉約、綱紀肅正が支持されたのか、それとも貴族的雰囲気を感じむ声に反対されたのか。その評価はわかれるところであるが、乃木の人となりについては、西田の言葉からも評価が得られる。

〔西田〕先生は乃木さんより東郷さんの方が上手であると言われた。日露戦争の後でお二人でイギリスの戴冠式に行かれた帰り、乃木さんが田舎に蟄居しているステッセル將軍を尋ねたいと言われたら、東郷さんがそれを止めるようにすすめられた。あの時、そんなことをしない方が、確かに東郷さんの言われたように、却って相手

を思うことになるであろう。そのように先生はいわれた。しかし先生は乃木さんの純情には深い敬意を抱いていられた。今の話も、乃木さんの短所と共に、長所を示すものだろうとも言われた。先生が学習院の教授だった時、乃木さんは確か学習院の院長であったのかと思う。先生は乃木さんという人は、電車で学習院にこられたが、その時にも車に傍らに立っていて、決して座席に腰を降ろすような人ではなかったと言われた。これは軍人でなければ人間でないように言われていた頃、先生から伺った話である。⁴⁶⁾

後に明治四五年（一九一一）九月一三日乃木が明治天皇崩御後殉死した際に、西田は田部隆次にあて次のような書簡を出している。

「拝啓 乃木さん御夫婦の自害は実に非常なる感動を与へました 特に小生の如き僅か一年程とはいへ日々將軍に接し居りしもの風貌今尚眼前に彷彿たる様に思はる 貴兄など尚更のことと思ふ あの様な真面目の人に対して我らは誠にすまぬ感じがする 乃木さんの死といふ様なことが 何卒不真面目なる今日の日本国民に多大の刺激を与へねばならぬ 乃木さんの死についてかれこれ理屈をいふ人があるが 此間何等の理屈を容るべき余地がない 近來明治天皇の御崩御と將軍の自害ほど感動を与へたものはない⁴⁷⁾」

弟を戦死させた責任者である乃木に、おそらく当初は複雑な思いを抱き、まみえただろう西田の、乃木に接した後の感想である。

(三) 西田幾多郎を取り巻く人々と学習院とのかかわり

ここで北條時敬、田部隆次をはじめとする西田幾多郎を取り巻く人々と、学習院の関係をみてみよう。第一章で述

べたように北條時敬は帝国大学を卒業後、石川専門学校教諭となった。このころ西田の家庭教師として数学を教えるようになり、数学のみならず參禪を勧めたり、深く西田幾多郎の人格形成に影響を与えた。西田にとって生涯唯一の師であった。⁽⁴⁸⁾北條はその後山口高校、四高校長などを歴任。東北帝国大学総長の後、大正六年（一九一七）より第一二代学習院長となった。西田が山口高校教授、四高教授になったのは北條の配慮によるものである。西田を学習院に紹介したのも書簡番号一二五において、西田が京都帝国大学へ移る件に付き「小生の事北條先生に相談いたし候処先生は賛否何とも申されず（これは先生が学習院へ小生を御推薦被下候行きかゝり上極めて御尤の事に存じ候）」とあり、北條の推薦であることがわかる。

田部隆次は四高教員時代の同僚であり、先に学習院女学部に奉職したので、第一章でみた通り、西田は学習院や東京の様子を度々田部に相談している。西田が上京したおりには西大久保の田部宅が宿となっており、西田の東京在住時にはごく近隣に住んでいたこととなる。田部は小泉八雲研究者で、田部が「小泉八雲伝」を出版した時には西田がその序文を書いている。⁽⁵⁰⁾西田の日記、書簡には小泉八雲に関する記述が多々あり、田部の影響であることがわかる。田部の兄はやはり学習院教授であり、小泉八雲の教え子の南日恒太郎⁽⁵¹⁾である。

山本良吉⁽⁵²⁾は四高在学時代からの同級生であり、鈴木大拙とともに終生かわらぬ交友をもった。京都帝国大学学生監⁽⁵³⁾の後北條時敬院長のもとで学習院教授を勤め、その後武蔵高校校長を長く勤めた。西田の山本良吉宛書簡が石川県西田幾多郎記念哲学館に数多く残されている。

鈴木大拙⁽⁵⁴⁾は西田と同年の明治三年生まれ、明治二〇年に四高にて西田と同級生となる。父が早世したために学資が続かずまもなく退学したが、禪、哲学を通じて西田との深い友情は生涯変わることなく続いた。西田と同じく明治四二年より学習院にて英語を教え、大正十年大谷大学へ転任するまで十三年間学習院に在職した。

学習院における鈴木大拙の様子は次のようである。「乃木希典將軍が院長をしておられた頃で、乃木さんは折々教室を廻って先生方の授業ぶりを視察した。院長が部屋にはいつて来ると、大抵の先生は急に襟を正し、語調も変って、緊張した面もちになったが、鈴木先生だけはどこ吹く風といった調子で、話しぶりも態度も少しも変らなかつた。そこで鈴木先生は他の先生とどこか違っている、えらい先生だと、生徒たちは子供心にもそんな感じをもったというこゝとである。」また、学習院のあり方についても「華族の子弟、ことに低能な子弟のために建てたものであつてはならないし、ただ華族の子弟を文部省的に育てるために建てたものであつてもならない。学習院はそれとしての存在の理由を明白にする必要がある。その存在理由の一つは、自由に勉強ができることだ」としている。⁽⁵⁵⁾

この他にも四高時代の同僚で西田とともに三々塾を指導した堀維孝⁽⁵⁶⁾、四高での先輩である清水澄⁽⁵⁷⁾、山口高校で同僚であつた小柳司氣太⁽⁵⁸⁾、アルフレッド・チャールストン⁽⁵⁹⁾などが教授として奉職しており、また西田が東京帝国大学にて哲学の授業を受けた井上哲次郎⁽⁶⁰⁾も講師として学習院に在籍していた。西田幾多郎とその当時の学習院の教員はかなり深くかかわりを持つ人々であつたのである。

三 西田幾多郎学習院での一年間

(一) 学習院教授としての生活

明治四十二年七月三十一日「学習院教授」辞令、そして九月一四日には「学習院独文主任」辞令が下りた。⁽⁶¹⁾ 学習院ドイ

ツ語教師としての西田幾多郎の生活がはじまったのである。

西田の日記では八月二十九日に「午前始めて学習院に行く」とあり、この日にはじめて目白の土を踏んでいることがわかる。九月二日には「午前乃木大将を訪ふ、不在。洋服屋来る」で、乃木との面会は果たせなかった。この「洋服屋来る」の記事であるが、当時学習院は学生のみならず教職員も全て制服を着用することとなっており、おそらくそのため洋服屋の来訪と考えられる。

九月一日始業式には教官服を着用した西田と鈴木大拙が並んで紹介された。⁽⁶³⁾

「今を去る三十三、四年前。学習院の卒業式の時であつたと思ふ。大礼服を着けた乃木大将の手から卒業証書と修業証書との授与の式を畢り、^{そは}続いて新しく教授に任ぜられた先生と学生との初対面の挨拶の礼式が交される例になつてゐた。(中略)ところで明治四十二年頃のことであつたが、この卒業式の際に、二人の新任教授が紹介された。或はもつとゐたかも知れない。新調の教官制服を着けた二人とも至つて風采の揚らない、小柄な弱々しい人に見えた。一人は独逸語教授、一人は英語の教授である。揃ひも揃つて恐しく度の強い眼鏡をかけてゐる。(中略)云ふ迄もなく独逸語の先生は西田さんであり、英語の先生が鈴木さんであつた。」⁽⁶⁴⁾

と当時の始業式の様子を長尾善郎は述懐している。

西田の授業時間は週に一八時限から二二時限。⁽⁶⁵⁾月曜日から土曜日までぎっしりと授業が入っている。住まいは東京府下西大久保三八四(現在の新宿区新宿六一二九、一五付近)で、旧加賀藩主であつた前田侯爵家の長屋に住み、通勤には汽車を利用してゐた。その通勤の様子を長与は同じく「三絶」のなかで「時には往復の省線電車の中で、先生に逢ふことがあつた。僕らは心をこめた敬礼をする。先生は一寸顔を拾げて挨拶を返すが、その眼はすぐ手の中のレクラム⁽⁶⁷⁾に吸ひつけられる。車中で先生に会へば必ずレクラムが揚げられてゐないことはない。」⁽⁶⁸⁾と常に西田が読書をし

ていた様子を書き記している。

明治四二年から明治四三年にかけての学習院『庶務課日誌』⁽⁶⁹⁾をみると西田は、一年間に五回(二月二日、同三日、一月二七日、二月四日、四月二二日)欠席をしている。西田の日記では二月二日「けふは学校やすむ」同三日「けふも休む」一月二七日「けふは出校せず」二月四日「(藤岡作太郎死亡により)朝より藤岡宅にあり」四月二二日「風ひき学校へゆかず」となっており、一致している。

さらに当時の学内でおこなわれた式の次第、教職員の役負担などが記されている『明治四十三年同四十四年式事録』⁽⁷¹⁾によると、明治四三年四月二日の卒業式では西田は白鳥庫吉、清水澄、小柳司氣太などとともに「来賓接待委員」に任じられている。無愛想であると評価されている西田に来賓接待委員は不適であるが、一教員としての責務を果たしていたわけである。ちなみにこの年の卒業生総代は柳宗悦⁽⁷²⁾であった。

学習院ならではの出来事もあった。当時宮内省所管であった学習院の教員は折々に宮家において催される園遊会などに招待された。現在石川県西田幾多郎記念哲学館には「観菊会」と「朝香宮結婚園遊会」の招待状が残されている。西田は自分あての書状をすべてその場で廃棄してしまったといわれているが、さすがに皇室よりの招待状は保存しておいたわけである。

日記では明治四二年十一月九日「午後二時より赤坂離宮の観菊会に行く」明治四三年四月二七日「本日午後瀆離宮にて観桜の御宴あり。陛下余程御老年に見ゆ、御ひげなど白し。皇后陛下はお丈低し。」四月三〇日「午後富美宮内親王殿下⁽⁷³⁾の御結婚を祝する為宮城に参り、それより麻布の御用邸に行く。」五月六日「本日允子内親王殿下、朝香宮殿下との御結婚あり。午後二時宮城に行き祝賀す。記念にステッキ一本買ふ。」六月二日「午後二時半より霞ヶ関離宮に於ける朝香宮殿下の園遊会に招かる。」の記事がある。このような席には夫人同伴が常であるが、西田は妻寿

美を伴わずすべて一人で行ったようである。孫の上田久氏によれば「幾多郎が学習院時代には、時に宮中へ呼ばれたりしたこともあったが、寿美は遂に一度もそのような晴れがましい席へは出なかった。これはそういう席へ出るだけの衣装を揃えることができなかった経済的な理由もあっただろうが、また人前へ出ることを好まない地味な性格でもあったらしい。」と推察している。⁽⁷⁶⁾

ところで明治三二年（一八八九）学習院内には全学生の活動を包括する組織として「学習院輔仁会」が創設された。⁽⁷⁶⁾ 輔仁会の中には編纂部・演説部・英語部・仏語部・独語部・運動部の六部が設けられ、編纂部は翌三三年六月『輔仁会雑誌』を発刊した。⁽⁷⁶⁾ 発刊当初は教育的・訓育的な内容が多かったが、明治三〇年代からは哲学的・文学的なものが主流となり、明治三九年に山内英夫（里見弴）・正親町實慶の小説が発表されてからは西欧文学・ロシア文学の翻訳、紹介が相次いだ。当時の編纂部員には後に『白樺』同人として活躍する山内英夫（里見弴）・柳宗悦・児島喜久雄がおり、武者小路実篤・志賀直哉・木下利玄・有島壬生馬（生馬）・長与善郎も在学中は輔仁会雑誌の投稿者であった。その第八十号に西田は「宗教論」を掲載している。これは後に『善の研究』「第四編 宗教の第一章 宗教的要求」から「第三章 神」までに収録される。両者にはほとんど差異はないが、若干の語句の相違が認められる。

では、肝心の西田の授業の様子はどうのようだったのか。再び、長与善郎の「三絶」よりみてみよう。

「教科書はヒルティーの『幸福論』で、その巻頭の文が「エピクテート」である。仏蘭西語を第二語学に選んだ者を除いた学生の数は十三四名位なものであったが、争はれない自然な識別感で、学生は最初からこの一見いかにも貧相な黙々とした先生に何かしら畏敬の念を感じ、不謹慎な態度をする者は一人もゐなかつた。もう一方にハイゼといふ独逸人が独逸語の会話を受持つてゐいたが、これはなかく風采は立派で、押し出しは堂々としてゐる。しゃれ者で、カイゼル髭をピンと弾ねかし、いやに反り返つた悠然たる歩き方までも勿体らしい様子なの

だが、頭は空つばで、呑気な漢おとこにすぎないといふことが顔に書いてある。だからその時間には学生が行儀は悪く、遊び半分位な気持でやつてゐる。それもこれも西田さんと丁度いゝ対照であつた。西田さんは、先づヒルティーのことを一寸語り、「眠フニア・シューラー・フロゼ・ネヒテられぬ夜なくに」といふ別の著書のあることなどを紹介されたが、学生の顔は見ず、只手中の仮り綴ぢの本を近視の厚い眼鏡にくつつけるやうにして、「エピクテート」の一句々々をボツ、ボツ、訳して聞かせるだけである。学生に読ました上、訳さして見て、その間違を直したり、質問をかけて理解を確かめたりするといふやうなことはしない。又黒板に字を書くことも殆んどない。大体「教える」といふこと、自分は教へる役目だといふことは余り念頭にないらしい。勿論訳以外の他の談しに移つたり、哲学めいたお説教など何一つするではない。職務に不熱心な中でも不忠実なでもないが、常に何か自分で考へてゐるので、ついそんな風になるといふ風に見えた。」というやうな教え方であつたらしい。しかし、長与の述によれば「しかし小ひさくはあるが、清く澄んだ北欧の湖水を想はせるこの質のいゝ内省的な書は、この哲学者が教科書に用ひるのには至極相応はしい本のやうに思はれた。この一言一句を西田さんが訳して聞かす調子は、他人の書を只口述してゐる上はの空の響きとは全くちがふ。恰も先生自身の実感をこの媒介物を藉りて述べてゐるかのやうに、妙に切実な生きた力があつた。一つの本をこんな風に自分のものにしてゐる活き／＼した講述を僕は前にも後にも聴いたことがない。当たり前である。この無名な一教師の主観は、その選んだ教科書の著者のそれより既に遥か上にあつたのだ。要らぬことは何一つ言ふまいとしても、時々一寸同感する文句に出会ふと、それを訳する先生の言葉は忽ち原文以上に溢れ、語調にはつい烈しい熱がこもつた。何か容易ならぬ烈々たるものが先生の裏に燃えてゐる。それがちらとした隙でも見つけると、すぐ焰の尖を見せる。その時水のやうな先生の蒼顔に一瞬血の気がぼつと泛ぶ。が、すぐ消えて了ふ。自分で消して了ふよように。」

とある種の畏敬を生徒たちにもたれていた様子がまざまざとわかる。

「三絶」中には教授会での西田の様子も記されており、「概して程度の低い学習院のことではあるが、例へば僕より一級上であつた柳（宗悦）がその級の首席で、一人だけ頭の進んだインテリであつたために、取入り屋の教師仲間から危険思想を抱く軟派と認められ、反対にZといふ極めて頭のわるい癖に卑怯な位如才のない学校きつての腕力家が、その一見剛毅朴訥な快男児らしさのために乃木院長のお気に入るだらうといふのでほめられた。その教員会議で西田さんが一人「柳は優秀で真面目な学生だ。Zは馬鹿ではないか」と云つたので、誰もその正説を駁しやうがなかつたといふ逸話もある。」と教授会において西田が正論を述べ、そのため誰も反論できなかった状況がわかる。⁽⁷⁷⁾

このように西田の学習院での一年間は過ぎていった。西田の京都帝国大学への転任については西田の日記明治四二年一月六日条に「山本君より手紙来り京都大学について話あり。」とあり、京都へのなんらかの話がなされたものと思われる。その後、山本良吉は日記に何度も登場するが、次に京都大学名が出てくるのは翌年四月二二日「山本、松本二兄より手紙来る。京大の事教授会にて定まりたりといふ。」⁽⁷⁸⁾で、決定後のこととなる。

学習院の西田の後任のドイツ語教師は高橋周而⁽⁷⁹⁾で、四高教員時代の後輩へのバトンタッチとなることから、西田が直接働きかけた可能性も有る。日記では明治四三年六月二八日「高橋周而及小田切へ手紙出す。」七月一日「発信高橋周而」の記事があり八月一二日には直接「午後高橋周而君を訪ふ。」八月二四日「午前八時高橋周而君の東行を送る。」とある。

明治四三年六月二三日には「けふ学習院の授業了る。」その後、試験、教授会を終わらせ、八月二日には「乃木大将を訪」ずれ、離任の挨拶をし、八月四日「午前九時半頃発、午後七時三十分京都に着す」⁽⁸⁰⁾となっている。

これで西田の教員としての学習院生活は終わるのである。

京都に移った西田は暫く京都になじめなかったようで、九月の書簡では「京都の景色は美は美なれども小生は寧ろ戸山ヶ原の如き景色を好み候」⁽⁸¹⁾「京都の新居住どうもまだうちつかぬ 何となく東京がこひしい(中略) 学習院では労働者の様に家にかやれば何もする事がなかつたがこちらでは始終追はれて居る感がして中々ノンキどころではない(中略) 高橋周而君其後いかゞせしか 京都は誠にさびしい どうか手紙でもくれ玉へ」⁽⁸²⁾「京都では随分孤独の生活を送つて居る」⁽⁸³⁾と書き送っている。

この時期学習院高等学科は高等学校大学予科と同等の学科程度を具備するものと認められ、卒業生の帝国大学への進学に関しては、高等学校大学予科の卒業生を收容後、定員に欠員がある分科大学には無試験で入学を許可するとされていた。⁽⁸⁴⁾この制度により学習院の卒業生(木戸幸一、⁽⁸⁵⁾原田熊雄、⁽⁸⁶⁾織田信恒、⁽⁸⁷⁾上田操、⁽⁸⁸⁾赤松小寅等)が京都帝国大学(法科大学)へ進み、京都において西田との交友を深めた。また、学習院中等学科から第一高等学校へ進み東大文科より京大法科へ転じた近衛文麿もこのグループに参加するようになる。この交友がいずれ「京都学派と日本海軍」⁽⁸⁹⁾の関係を生み出す事になるのであるが、京都においては

「僕(長与)は離れたが、同級及び上下二級の生徒は当時の規則で皆京都大学の法科へ入学したので、学習院時代の御縁故を懐しみ、丁度同じ京大へいよゝ正式に哲学の助教授として赴任された西田さんを囲み、凡そ哲学とは縁もゆかりもないワイワイ連、たとへば木戸幸一、織田信恒、永く西園寺さんの秘書をしてゐた原田熊雄、大審院判事の上田操、及び上田と同級で僕らより一級下であり、一高に移った近衛文麿等によく先生を牛肉の会食やピクニックにお誘ひして歓を偕にし、先生も喜んで出かけられたといふ。織田、原田などは中でも飄軽者⁽⁹⁰⁾であるから、随分出鱈目な冗談騒ぎをやつたらしいが、そこに皆の先生に対する特別の親愛と尊敬が自づこもつてゐる。先生の方ではどうせこいつらにはむづかしい話をしたつて分りはしない。たゞ可愛い、と思つてゐるの

だから、その無邪気を面白がり、にや／＼傍観してゐられたのであらう。⁽⁹⁾
とあり、ほのぼのとした交友があったことを髣髴とさせる。

(四) 西田幾多郎と白樺派

前節で長与善郎の文章より西田の様子を見てきたが、長与は白樺派の作家である。白樺派とはいまさら説明するまでもないが、大正時代、同人雑誌『白樺』に拠った文学者集団をさす。その誕生の経緯は、明治四〇年（一九〇七）四月一日に学習院の武者小路実篤・志賀直哉・木下利玄・正親町實慶の四人が各々書いたものを持ち寄って批評し合う会、「二四日会」をはじめたことによる。二四日会は翌四一年七月から回覧雑誌『暴矢』を発行した。これに刺戟を受けた二学年下の山内英夫（里見弴）・児島喜久雄・正親町実慶（目下諺）・田中治之助（田中雨村）・園池公致らが一月から回覧雑誌「麦」を、三学年下の柳宗悦・郡虎彦（萱野二十一）が翌年一月から回覧雑誌「桃園」を始めた。互いに批評しあっていた三誌の間からともに雑誌を刊行する計画が持ち上がり、明治四三年四月に『白樺』が創刊された。⁽¹⁰⁾前節で述べたように彼らは『輔仁会雑誌』の編集委員であり、西田はそこに『宗教論』を掲載している。このうち長与善郎は西田の授業を直接受けており、また、柳宗悦についても西田と関わりがあることに言及した。明治四二年の『輔仁会雑誌』編集委員は上田操・赤松小寅であり、かれらはその後京都帝国大学へ進学し西田との交友をつづけている。

学習院在学白樺派

本名	ペンネーム	備考	生年	入学年 (明治)	初等学科卒 業年(明治)	中等学科卒 業年(明治)	高等学科卒 業年(明治)	輔仁会雑誌掲載文および掲載号(数字が号数、卒業後のものも含む)
有島武郎		有島生馬・ 里見弾の兄	1878	20(予備科 3年)		29		「鯉説」31「この合肥」(ワルト・ホイットマン作の訳)117
正親町公和		日下諗の兄	1881	34(中等学 科4年)		36	39	「旅の落葉」61「行軍日誌」61「銃煙」61、200「胸の響」62「行軍日誌」 63「速かに一大寄宿舎の設立を望む」66「新年」77
有島壬生馬	有島生馬		1882	27(初等学 科6年)	28			「少年の務」50「羔を歌ふ」55
志賀直哉			1883	22(予備科 6年)	28	36	39	「銃煙」61、200
武者小路実篤			1885	24(初等学 科1年)	30	36	39	「所感録」61、62「偶感録」64「現代の文明に就きて」66「如何にして 世は改良せらるゝか」67「貴族主義」77「学習院に就いて一寸」 103「雜感」134「人生と文芸(述)」162「学習院の思い出」180、182 「安倍先生の思い出」188「貴族主義」197「実篤氏と一時間」 輔仁会雑誌と白樺派> 輔仁会雑誌編輯室、武者小路実篤」197
木下利玄			1886	24(初等学 科1年)	30	36	39	「必要品を度々忘る友に贈る文」47「落花に対して感を述ぶ」 52「雪の日に北京城の兵士を思ふ」54「和歌十五首」54「穴 居の跡」55「我が故郷」57「折にふれたる歌十五章」57「大 島之歌」58「木曾の山越」59「雜司が谷道の秋色」61「秋の 歌」61「行軍日誌」61「銃煙」61、200「蛇の目傘」62「行軍 日誌」63「雜司が谷道の秋色」 輔仁会雑誌と白樺派>」197
園池公致			1886	33(中等学 科2年)				
正親町実慶	日下 諗		1887	34(中等学 科1年)		39	42	「貧民窟を過ぎて感を述ぶ」60、200「教育の本旨」78「二十週年の 本誌に寄す」81
児島喜久雄			1887	31(初等学 科5年)	32	39		「僕の夢(述)」162
山内英夫	里見 弾		1888	29(初等学 科3年)	33	39	42	「怡吾菴放談(いごあんほうだん)―里見弾氏を訪ねて―」199
田中治之助	田中雨村		1888	27(初等学 科1年)	33	39	42	「河野通有」51
長与善郎			1888	32(初等学 科5年)	35	41	44	「外国留学の友人に贈る文」57、200「寒夜随感(長与善次郎)」77 「時代の寵児」80「元気の真義」83
柳 宗悦			1889	28(初等学 科1年)	34	40	43	「牛」45「鹿」49「少年ノ怠惰ハ老後ノ貧乏トナル」54「遠足之記」 55、200「前号短評」79「図書館に就て」79「逝ける徳川治君に」89 「或若き友への手紙」103「宗教的世界(講演の要旨)」116「東洋文 化の教養」173
郡 虎彦	萱野二十一		1890	35(中等学 科1年)		41	44	

『開校五十年記念 学習院史』(学習院、1928)・『学習院輔仁会雑誌目録(第1号～第200号)』(学習院、1980)より作成

おわりに

以上、明治四二年の学習院を中心に据えて、西田幾多郎の動き、その動きに絡まる人々とその活動を、様々な資料から浮かび上がらせてきた。

たしかに「学習院」はその当時「特異」な場であった。いずれ国家を担っていかねばならないと期待される華族の子弟と「定員の三割を超えない、入学を許された」平民の学生、当代一流の教授陣、明治四二年の人々もある意味「綺羅星」の如き人々である。その中でエリートコースを外れ、裕福とは程遠い西田幾多郎が勤務し、僅か一年ではあるが、確かに足跡を残し、人々の心中に種を撒いていく。また、西田も人々から種をもらい、この場から「活躍」をしていくのである。

『白樺』の発刊の辞に「自分達はここに互の許せる範囲で自分勝手なものを植ゑたいと思つている」とあるように、自分の個性に応じて自由に自己表現、自己伸長をはかることが白樺派の目的であった。これは西田が『善の研究』において「純粹経験」を「個人的、主観的な自己そのものがそこから成立していくような立場」としていることと相通じる姿勢である。大正デモクラシーの文学分野を担う「白樺派」と日本における哲学を樹立した西田の「善の研究」が同じ時期、同じ場所で作られたことは今後考察に値するだろう。

昭和三年（一九二八）京都帝国大学を定年退官した後、西田は鎌倉に居を得、京都と鎌倉で半々に過ごす生活を送りながら思索と著作に没頭した。また、この場所で再婚をし、鈴木大拙をはじめとする様々な人々と語らった。その中で学習院の卒業生で京都帝国大学へ進んだ近衛文麿、木戸幸一らと度々会うことで「京都学派と日本海軍」が接触を持っていく。この「京都学派と日本海軍」とは一言で言えば、京都学派が「日本海軍の一部とつながり陸軍の戦争

方針を是正しようとする際「集まり」をもったことであるが、この事象と西田、学習院の関係については次回以降にさらに言及することとしたい。

昭和二〇年（一九四五）西田幾多郎はこの鎌倉の家で終焉を迎える。その後、昭和四八年（一九七三）琴夫人の没後、学習院大学第一回卒業生である孫の西田幾久彦氏よりこの遺邸は学習院へ寄贈され、「学習院西田幾多郎博士記念館（寸心荘）」として開館し、今も利用されている。

記念館開館にともない各方面から収集された「西田幾多郎関係資料」は、その後史料館に移管され、さらに収集を続け、平成一四年（二〇〇二）末で五八五件に達している。

西田の学習院時代は決してマイナスではない。従来、殆んど注目されて来なかった「西田幾多郎と学習院」はもっと評価されるべき関係であることが、今回検証できた。

今後は、哲学関係者以外の書簡などの資料を調査し、さらに「西田幾多郎と学習院」像を膨らませていきたい。

最後に『輔仁会雑誌』第八二号に掲載された「西田先生の本院を去らるゝを惜しむ」の翻刻を掲載し、一年間の短い間ではあったが、いかに西田が学習院において敬愛されていたかを測る実証としたい。

西田先生の本院を去らるゝと惜む^(ママ)

高、一、二 有志 同人

楽しく遊んだ六旬の休暇も早や過ぎ去て今や肌寒い秋冷の候となった、秋晴、美日、星斗降るが如き夕、実に勉強努力には好適の時節となった、疲れたる頭脳は二月の休暇で再び新しい活気を帯びてきた、さらばいざこれ

から心をひきしめて浄机に向ひ、燈火親しむべき秋の夜をひたすら勉学に耽らんとするに当ても何となく、物足りなく心惜く思はれるのは実に西田先生の我校を去られたことである、あゝ、実に先生の去られたことは我が校にとりては一大打撃であつたと僕等は云ふのを躊躇しない。

思へば実に先生が我校に教鞭をとられてから僅かに一年であつた、あゝ、この短かき一年、たゞの一年にして吾等の尊敬せる先生は吾等を去て洛陽の学府に赴かれたのである、しかし翻てこの一年間に先生が我校に与へられた影響、感化を思へばその明かに見えないほどそれだけ偉大であつたと思ふ。先づ第一に思ひ出されるのは、先生の崇高なる人格である、先生の人格は心ある者には云ひ得ぬ一種の感化を与へた、次に先生の学問に対する熱心である、さなきだに怠惰に陥り、不勉強に忸れ易き吾等をして勇奮、邁往せしめられたことは一に先生の感化によるのである、先生があゝの素朴な何の虚飾のない姿で教壇に立たれたとき僕等は何時とも一種崇高な感にうたれざるを得なかつた、先生は決して世の多くの先生が為す如く学生に対して少しの容赦もせられなかつた、一步の讓歩一寸の許容をもせられなかつた、一言たりとも学生の氣に入るやうなことは云はれなかつた、僕等は此点に於て殊に深く心地よく感じた、実に先生は努力主義である、奮闘主義である、強烈なる意志力を以て勇往邁進せんとする主義であつた、かくして先生の五十分には一分の余裕、一分の休息さへなかつた、故に一時間は始から終まで引きしまつて居眠りをする余地がなかつた、時に先生は大声をあげて痛切に吾等の怠惰、不注意、不勤勉、殊に学問に対する態度の沈重篤実でないことを叱り給ふた、けれどもその裏面には常に云ふに云はれぬ温い愛が豊かに溢れてゐた、先生の一言一行には凡て悉く威厳があつた、この威厳とこの愛とが知らず／＼吾等には云ひ得ぬ愛慕の情を起さしめたのであつた。

此の如き恩威を以て熱心に嚴肅に吾等を導き給ふた先生は僅か一年にして吾等を去て京都大学へと転任せられ

た、実をいへば僕等は先生の努力的教鞭の下に幾多の難解なる書を読み得る日を何より楽しみにしてゐた、しかるに先生が去らるゝときいたときの僕等の悲みはいかばかりであつたらう。又先生は去曠の輔仁会雑誌に「宗教論」と題して極めて有益なる論説を掲げられた、この有益なる論文より我等の益したことは幾許であつたらう実に僕等は未来に於て先生が愈々吾等の思想の真摯なる指導者となり給はんことを希望してゐた、しかるに今や先生は去られて輔誌の上に先生の高論を載せることの出来ないのは実に残念の至でたまらない。

之を要するに西田先生は僕等の本院に於て尊敬せる先生の一人であつた、しかし最も近くに来られて最も早く吾等を去られた故に、更に先生に対する愛慕の情は強い、呉々も先生を失ひし本院の不幸を思ひつゝ又洛陽城畔に日夜研究に心をひそめ給へる先生を思ひて吾等は奮励一番大に努力しなければなるまいと思ふ。

(十月六日夜記)⁽⁹⁴⁾

註

- (1) 島谷俊三「善の研究」の生まれるまで一寸心先生伝資料の一節―(高山岩男・島谷俊三編『西田寸心先生片影』黎明書房、一九四九年)。
- (2) 上田久『祖父西田幾多郎』(南窓社、一九七八年)。
- (3) 遊佐道子「伝記 西田幾多郎」(『西田幾多郎選集』別巻一、燈影舎、一九九八年)。
- (4) 明治四一年(一九〇八)七月一六日付、田部隆次宛、書簡番号八五。『西田幾多郎全集』第一八卷(岩波書店、増補改訂第四版、一九八九年)以下、西田差出書簡、日記(第一七卷所収)はこれによる。『西田全集』と略記。
- (5) 平成一三年七月一六日「学習院大学史料館第二回館内研究会」においての上田薫氏の証言による。
- (6) 藤岡作太郎。西田の四高以来の友人。「日本風俗史」『近世絵画史』などを著し、国文学を学問として初めて成立させた人といわれる。
- (7) 明治三六年(一九〇三)七月六日付、堀維孝宛、書簡番号四四。

- (8) 明治三十九年(一九〇六)三月六日付、堀維孝宛、書簡番号五一。
- (9) 明治三十九年(一九〇六)三月二日付、堀維孝宛、書簡番号五四。
- (10) 明治三十九年(一九〇六)二月二日付、堀維孝宛、書簡番号五六。
- (11) 『哲学雜誌』第二四一号。
- (12) 明治四〇年(一九〇七)三月二六日付、堀維孝宛、書簡番号五九。
- (13) 明治四〇年(一九〇七)五月一九日付、堀維孝宛、書簡番号六〇。
- (14) 明治四〇年(一九〇七)七月二八日付、田部隆次宛、書簡番号六一。
- (15) 田部隆次は西田の四高教授時代の同僚、西田が学習院へ移る二年前に学習院女学部へ転職し、西田の学習院転職の相談相手となっている。
- (16) 明治四一年(一九〇八)一月二四日付、田部隆次宛、書簡番号七二。
- (17) 明治四一年(一九〇八)五月三日付、田部隆次宛、書簡番号七九。
- (18) 明治四一年(一九〇八)六月一八日付、田部隆次宛、

- 書簡番号八一。
- (19) 東京帝国大学、三高、真宗大学、大谷大学、名古屋などの話があったことが書簡よりわかる。
- (20) 上田久『祖父西田幾多郎』(南窓社、一九七八年)また、註(16)と同じ書簡番号八一では「吉村さんは小生の病気がもう少しつゞけばやめるような事を云はれたので一時困ったが、此の分なればまさかさる事もなかるべし、尚暫く御厄介にならうかと思うて居る」という心境になっている。
- (21) 伯爵林博太郎、明治三六年より四一年まで学習院教授。貴族院議員、満鉄総裁など歴任。
- (22) 註(4)に同じ。
- (23) 明治四二年(一九〇九)六月九日付、山本良吉宛、書簡番号一一。
- (24) 明治四二年(一九〇九)六月二五日付、田部隆次宛、書簡番号一二においては「西大久保より学習院の方へ通ふ便利は有之候や、汽車の便がある様に聞き候へども汽車は丁度毎朝八時なら八時まででに学習院に行き得る様に発車するか否や、又汽車にて幾分程かゝり候や、又或人は汽車にて毎日通ふは身体にわるしなど申候がいかにものによ」目白近辺には良好の小学校有之候や、子

- 供は皆どうも愚鈍もののみ故せめてよき小学校に入れてよき教育を受けさせ度と存じ居り候」と心配をし、書簡番号一一六においては「風呂桶などは東京にていか程いたし候哉 あまり高ければこちらから買うて行かうかと思ひ居り候 又漬物桶など持ちてゆく方よろしく候や」と家庭用品の心配までしている。
- (25) 学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史』(一九八一年)。
- (26) 霞会館華族資料調査委員会編『華族会館誌』巻三 明治九年一月五日〜一月一九日(一九八六年)。
- (27) 註(25)に同じ。
- (28) 註(25)に同じ。
- (29) 岡田茂弘「史料館所蔵の明治初期洋瓦」(『学習院大学史料館紀要』一一号、二〇〇二年)。
- (30) 国分高胤監修『観樹將軍回顧録』(政教社、一九二五年)。
- (31) 近衛篤麿、第七代学習院院長(明治二八年〜三七年)公爵。近代日本において華族がその社会的地位を確立し、政治的社会的に皇室の「藩屏」としての役割を果たすことを念願した。近衛文麿はその長男。
- (32) 宮内省の財政難も工事着工の遅れる原因となった。
- (明治三二年〜三九年まで東宮御所(現迎賓館)の建築工事が行われている。)
- (33) 久留正道(一八五五〜一九一四) 明治二八年(一八九五)『学校建築図説明及設計大要』を著した。「小学校、中学校、師範学校の最も推奨すべき建築について、具体的、技術的に詳細にわたってその計画法が述べられており、明治後期の類型化した学校建築の原型となったものと位置付けられている。」(日本建築学会「目白じろじろウォッチング」パンフレット、二〇〇一年より)。
- (34) 伊藤裕久『歴史的都市・建築の保存と再生―学習院内の古い洋館―』(学習院大学史料館講座二七、レジューム、一九九九年より)。
- (35) 註(25)に同じ。
- (36) なお初等学科は、明治三二年(一八九九)に校舎を新築したため、そのまま四谷にとどまることとなった。
- (37) 図書館は大正二二年(一九二三)関東大震災で書庫三階が大破したため二階建てとし、隣に平屋の書庫を設けた。昭和三五年に新図書館が建築されるまで図書館として使用された。新図書館は前川國男の設計で、旧図書館の形を模している。昭和五〇年(一九七五)には史料館が開館した。昭和五三年(一九七八)北二号館建設の

ために書庫と北側翼部は取り壊され、北北東へ三〇メートル轢屋され現在に至っている。学習院の校章である桜花の文様が床下換気口、廊下下がり壁、ドア蝶番などにさりげなくデザインされている。

(38) 『榊壇ト乃木院長室』(学習院、一九三四年)。

(39) 日高第四郎「乃木大将と鈴木大拙先生の印象及び思い出」(久松真一他編『鈴木大拙一人と思想』) 岩波書店、一九七一年)。

(40) 『聖教新聞』明治三十七年一月(『西田全集』第一三卷)。

(41) 金沢の第九師団は乃木率いる第三軍に配属された。

(42) 西田の幼馴染海軍少佐向菊太郎は一九〇四年四月二十五日元山付近で戦死「向少佐を憶ふ」(『北國新聞』明治三十七年五月『西田全集』第一三卷)。

(43) 『西田全集』第一七卷。

(44) このとき寄贈された船は乃木の名前から「桜朶丸」と名づけられた。明治四二年当時の游泳場は神奈川県片瀬海岸、静岡県沼津に游泳場を建設したのは大正二年(一九一三)のことである。

(45) 近衛篤磨は華族の従事すべき業務として、陸海軍の武官や貴族院議員のほかには外交官をあげ、外国語教育の

強化をはかった。また、外国のスポーツも積極的に取り入れた。

(46) 高坂正顕『西田先生の追憶』(一燈園燈影舎、一九九六年)。

(47) 大正元年(一九一二)九月一七日付、田部隆次宛、書簡番号一五九。

(48) 『働くものから見るものへ』を西田は北條時敬に献呈している。西田が自著を献呈しているのは北條のみである。

(49) 明治四三年(一九一〇)五月三日付、山本良吉宛、書簡番号一二五。

(50) 「小泉八雲伝」序、大正三年四月(『西田全集』第一卷)。

(51) 明治三五年九月〜大正一二年九月学習院在職。

(52) 大正七年三月〜大正一一年四月学習院在職、北條の院長辞任に伴い山本も辞職している。

(53) 書簡番号八一には「小生が京大の学生監となるのに松本が不賛成を唱へたといふのは小生は何も知らぬが或いは然らんと思ふ(中略)京大の学生監は余の親友山本良吉氏が任命せられる事に内定し居り近日の中その発表を見るならんと思ふ」とあり、北條は西田、山本の双方

を学生監に推薦していた可能性がある。

劉邦。

(54) 明治四二年八月〜大正一〇年五月学習院在職。

(66) 『明治四十二年九月一二月間高等学科中等学科各教員受持時間表』では一八時限、『明治四十三年一月三月

(55) 麻生磯次「鈴木先生と学習院」(久松真一他編『鈴木大拙―人と思想―』岩波書店、一九七一年)。

間高等学科中等学科各教員受持時間表』では二二時限、『明治四十三年四月七月間高等学科中等学科各教員受持

(56) 大正五年四月〜大正一三年一月学習院在職。

時間表』では一九時限、いずれも学習院院史資料室蔵『学級教員時間表』簿冊より。

(57) 明治三二年七月〜大正五年六月学習院在職。

(67) レクラム文庫、ドイツの叢書。ライプチヒのレクラム出版社が「世界文庫」の名で一八六七年に創刊。あらゆる文化部門の著作を厳選し、簡素な装丁と廉価で普及

(58) 明治三七年一〇月〜大正一二年三月学習院在職。

をはかったもの。文庫本の範となった。

(59) 明治四〇年八月〜大正二年九月学習院在職。

(68) 註(64)に同じ。

(60) 明治三五年一月〜大正一二年三月講師として学習院

(69) 学習院院史資料室蔵。

に在任。

(70) 註(43)に同じ。

(61) 各辞令は現在石川県西田幾多郎記念哲学館に收藏されて

(71) 学習院院史資料室蔵。

いている。

(72) 柳宗悦、明治二八年初等学科入学、明治四三年高等

(62) 明治三八年「学習院職員服制」制定。註(25)に同

学科卒業。大正、昭和の民芸運動家である。

じ。

(73) 允子内親王、明治天皇の第七皇女。幼名富美宮。朝

(63) 鈴木大拙の教官制服写真は松ヶ岡文庫に所蔵されて

(74) 註(2)に同じ。

いるが、西田に関しては管見では見つかっていない。

(75) 会の名は論語顔淵篇「君子以文会友、以友輔仁」よ

(64) 長与善郎「三絶」(『日本現代文学全集』第五〇巻、

講談社、一九六三年) 学習院高等学科の卒業期は明治四

二年まで七月で翌四三年から三月になった。

香宮鳩彦王妃。

(65) 長与善郎、明治三二年学習院初等学科五年入学、同

四四年高等学科卒業。白樺派の小説家。代表作「項羽と

り選んだものである。

- (76) 当時高等中学校の校友会雑誌は山口高等中学校の『学友』のみしか発行されておらず、輔仁会雑誌は全国諸学校の校友会雑誌のうち最も古いものの一つであり、現在まで二二六号発刊されている(『学習院の百年』学習院、一九七八年)。
- (77) 註(64)に同じ。同様の記述が長与善郎「その頃の学習院(三)」(東京朝日新聞 昭和十四年十一月二十五日)にもある。
- (78) 註(43)に同じ。
- (79) 明治四三年八月〜大正四年八月学習院在職。
- (80) 註(43)に同じ。
- (81) 明治四三年(一九一〇)九月一三日付、田部隆次宛、書簡番号二二八。
- (82) 明治四三年(一九一〇)九月一九日付、田部隆次宛、書簡番号二一九。
- (83) 明治四三年(一九一〇)一月一日付、田部隆次宛、書簡番号一三〇。
- (84) 註(25)に同じ。
- (85) 第一次近衛内閣の文部大臣、平沼内閣内務大臣、内大臣を歴任。近衛文麿と共に「革新貴族」を代表。
- (86) 西園寺公望の秘書官。
- (87) 貴族院議員。『正チャンの冒険』の作者。
- (88) 西田幾多郎の長女弥生の夫となる。
- (89) 京都府知事。
- (90) 大橋良介『京都学派と日本海軍 新史料「大島メモ」をめぐって』(PHP研究所、二〇〇一年)に詳しい。
- (91) 註(64)に同じ。
- (92) 『一九一〇年「白樺」創刊』(調布市武者小路実篤記念館、二〇〇〇年)。
- (93) 註(90)に同じ。
- (94) 『輔仁会雑誌』第八二号(学習院、一九一〇年)。